

没後 200 年 山東京伝展

■会 期：2016 年 5 月 14 日(土)~6 月 30 日(木)

■休 館：5 月 30 日(月)、6 月 29 日(水)

■会 場：明治大学中央図書館 1F ギャラリー(入場無料)

■時 間：図書館の開館中は、観覧いただけます。

図書館の開館情報はホームページでご確認ください。

■URL：<http://www.lib.meiji.ac.jp>

■お問い合わせ：明治大学中央図書館

〒101-8301 千代田区神田駿河台 1-1

TEL 03-3296-4250





「没後 200 年 山東京伝展」開催にあたって



日本近世文学会春季大会が、本年 5 月 14・15 日の両日、明治大学リバティホールにおいて開催されます。これに合わせて、本学図書館の蔵書の中から、江戸時代後期の戯作者・山東京伝きょうでん（1761～1816）に関する資料を展示し、春季大会にご参加の方々や、明治大学の関係各位、さらに一般の方にもご覧いただくのが、今回の展示です。

本学図書館では、1999 年に「江戸文藝文庫」を創設いたしました。これは、本学文学部の教授で、日本近世文学会の創立にも関与された、水野稔先生（1911～97）の旧蔵書を中核とするコレクションです。この文庫は、洒落本しやれほんや黄表紙き びょうし・合巻ごうかんといった、江戸時代後期の通俗小説を数多く含むものとして、広く学外にも知られています。

山東京伝は、流行作家として大量の作品を執筆・刊行する一方、浮世絵師北尾政演きたお まさのぶ、狂歌師身軽折輔みがるのおりすけなどとしても活躍しました。本年は京伝の没後 200 年に当たり、春季大会でも、京伝に関する研究発表が複数行われる予定です。今回の展示では、彼の多面的な活動を概観していただきたいと思います。

展示する書籍の選定は、法学部兼任講師の二又淳先生にお願いいたしました。先生のご尽力により、個人蔵の貴重な資料も、あわせて展示することができました。

最後に、今回の展示にご協力いただいた、明治大学中央図書館に、感謝の意を表します。



明治大学法学部准教授

神田 正行

山東京伝の生涯

京伝は本名を岩瀬醒といい、宝暦 11 年（1761）8 月 15 日、江戸深川木場（東京都江東区）の質屋の息子として生まれた。12 歳のころ、父とともに京橋銀座 1 丁目に移り住み、18 歳のころから黄表紙（滑稽な絵入り小説）の画工、ときには作者をも兼ねてその名を出していた。

若き日には吉原の遊里に遊び、その経験を活かして、遊里の写実小説である洒落本を執筆し、その第一人者として実力と名声とを獲得した。30 歳の時、吉原扇屋の新造（あまり身分の高くない女郎）菊園と、彼女の年季があくのを待って結婚した。この愛妻は、たった二年で病死したが、その後、四十歳でめとった後妻百合もまた遊女あがりである。

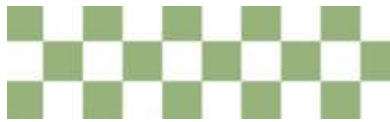
やがて、松平定信の断行した寛政の改革によって、世相諷刺や遊里描写の作家作品は弾圧された。版元薦屋重三郎の懇請によって執筆した洒落本 3 部のために、京伝は寛政 3 年（1791）2 月、手鎖 50 日の刑に処せられた。

筆禍の翌年、京伝は新たに紙製煙草入れの商店を銀座に開いて、生計の道を立てるとともに、依然文筆の道をも続けていた。しかし、やがて勧善懲悪の教訓を表にかかげ、因果応報で筋を通す伝奇小説、すなわち読本の作者に転向する。

晩年の京伝は、戯作よりも近世初期の風俗考証に専念し、『骨董集』という大著の完成に心血をそそいだ。そして、文化 13 年（1816）9 月 6 日の夜、弟京山宅からの帰途、胸痛の発作を起こし、翌日未明に 56 歳で没した。

（水野稔氏「山東京伝—艶麗美追求の洒落本作家—」から抜粋）





黄表紙（きびょうし）

—絵入りの滑稽小説—



江戸時代中期以後数多く出版された、絵を主とする小説「草双紙」の様式。黒本・青本のあとを受けて、当時の世相、風俗、事件などを、流行語をまじえて写實的・諧謔的に描写する。そのはじまりは、安永4年（1775）刊の恋川春町作画『金々先生栄花夢』とされる。以後、洒落と機知によるおかしさをねらった、「成人の漫画」ともいうべき作風がうち立てられた。

天明年間（1781～89）には、芝全交や唐来参和、山東京伝などによって全盛期を迎えたが、天明末の政治状況に取材した、春町や喜三二の作品が当局の忌諱に触れ、取締りが厳しくなった。

寛政2年（1790）刊行の『心学早染草』で、京伝はいちはやく理屈臭い真面目な作風に転向した。寛政期に登場した十返舎一九や式亭三馬、曲亭馬琴らの新人も、京伝の新傾向に倣って、教訓を主題とせざるを得なかった。

やがて南仙笑 楚満人の『敵討義女英』（1795）が注目を集め、文化年間（1804～18）には敵討物が黄表紙を支配するにいたり、黄表紙の戯謔は完全に失われる。

（世界大百科事典「黄表紙」項（水野稔氏執筆）から抜粋）

1. 娘敵討古郷錦（むすめかたきうちこきょうのにしき）3巻合1冊 913.57/SA1-8//H

鶴屋喜右衛門刊。中巻絵題簽存。15ウに「京伝戯作」とあり、京伝の筆名初出作である。本年刊の『米饅頭始』には「北尾政演作画」とあり、それぞれ京伝最初期の自作画として知られる。執筆時、京伝は19歳。京伝の墓碑文には、19より戯作を始めると刻まれる。稚拙な敵討物で、いわば習作期の京伝作品である。

2. 三筋緯客気植田（みすじだちきやくのきうえだ）3巻合1冊 913.57/10//H

薦屋重三郎刊。絵題簽完。当時流行の上田紬（つむぎ）の三筋緯（だち）を、三人の遊客の気性にたとえたタイトル。展示個所（11ウ・12オ）は、客と遊女としての付き合いを、88歳と75歳の共白髪の年齢まで続ける二人の痴話喧嘩の場面。そののち二人はめでたく結婚する。洒落本『総籬』と関連深く、「最も洒落本に近接した黄表紙の一つ」とされる（水野稔『大東急記念文庫善本叢刊黄表紙集』解題）。

3. 甚句 / 義経 真実情文桜（しんじつせいもんざくら）3巻合1冊 913.57/11//H

西宮新六刊。絵題簽完。題名は心が変わらないことを誓う「真実誓文」と「義経千本桜」のもじり。浄瑠璃「義経千本桜」の登場人物が出雲の神の縁結びで結ばれるまでの騒動を描く。展示個所（7ウ・8オ）には、「そなたは、今度突き出しの花扇に生き写しだ。どふぞ菊園に見せたい」と、のちに京伝の妻となる「菊園」の名を出すなど、遊里の楽屋落ちが散見する。

4. 孔子稿于時藍染（こうしじまときにあいぞめ）3巻3冊 個人蔵

大和田安右衛門刊。寛政の改革に取材した黄表紙のなかでも有名なもの。伝本は多いが、状態の良いものは少ない。展示品は最終第15丁を欠くものの、摺りの良いものである。朱子学奨励の世の中で、物貰いまでもが学問に励む（1ウ・2オ）。「大高売」の呉服屋（7ウ・8オ）や、追剥ならぬ「追剥がれ」（12ウ・13オ）など、現実の裏返し。

5. 一百三升芋地獄(いっぴゃくさんじょういもじごく) 2巻2冊 913.57/32//H

大和田安右衛門刊。絵題簽完。題名は一百三十六地獄のもじり。パネル展示個所(1ウ・2オ)は、芋地獄の大王の前で、地獄に落ちた山の芋が樽の鏡の前に引き据えられるが、鏡には鰻の形が映る。諺に「山の芋鰻になる」という。

6. 三河島御不動記(みかわじまごふどうき) 2巻合1冊 913.57/SA1-9//H

鶴屋喜右衛門刊。後の手彩色があるものの、摺りは良い本である。当時流行した三河島不動尊に取材した作。不動尊は炭団の精おゑんと夫婦になり、せいたか童子・こんがら童子の子宝にも恵まれるが、酒の爛をする時正体を見られたおゑんは、葛葉狐のように書置きを残して(6ウ・7オ)不動尊のもとから消えてしまうのであった。

7. 山鵜鳩蹴転破瓜(やまほととぎすけころのみずあげ) 3巻合1冊 913.57/8//H

鶴屋喜右衛門刊。擬人化された旭如来と九郎助稻荷が、一人の遊女をめぐって争いをする話。『伊波伝毛乃記』では、本作は評判当たり作であったという。巻末(14ウ・15オ)「追加」には、主人公の旭如来と九郎助稻荷の二人が、作者京伝を訪ね、作品の内容について文句を言う場面が描かれる。

8. 盧生夢魂其前日(ろせいがゆめそのぜんじつ) 3巻3冊 913.57/SA1-77//H

蔦屋重三郎刊。絵題簽完。「弗居庵蔵書」(八木敬一)印。黄表紙では使い古された「盧生の夢」の趣向、冒頭盧生が『金々先生栄花夢』『見徳一炊夢』などの名作黄表紙を読んで、自分も栄華を極めたいと思っている。夢を司る夢魂道人は、盧生の願いを叶えるため、道具を用意し筋書も書いて、稽古そのほか準備万端、後は盧生に夢を見せるまでの前日譚を描いたのが京伝の新趣向。

9. 実語教幼稚講釈(じつごきょうおさなこうしゃく) 3巻合1冊 913.57/19//H

蔦屋重三郎刊。絵題簽完。勝川春朗は葛飾北斎の前名。京伝と北斎のコンビは本年板黄表紙が初めてである。本作は、中国人名や中国故事が多彩な作品で、文章・詞書は曲亭馬琴の代作、画稿は京伝の手による共同制作(『江戸作者部類』他)という。

10. 新板替道中助六(しんばんかわりましたどうちゅうすけろく) 3巻合1冊 913.53/SA1-6//H

鶴屋喜右衛門刊。改装裏打本ながら、摺りの良い本である。題名は新年の道中双六売りの呼び声のもじり。展示個所(2ウ・3オ)は、東海道第一番目の宿場「しな川」。助六の名台詞「刷毛の間から安房・上総が見へる」をそのままに、尺八を遠眼鏡の気取りにして、皆々に見せている場面。

11. 堪忍袋緒×善玉(かんにんぶくろおじめのぜんだま) 3巻合1冊 913.57/SA1-11//H

蔦屋重三郎刊。寛政2年刊『心学早染草』、同3年刊『人間一生胸算用』に続く3編。展示個所(1ウ・2オ)は、京伝と妻お菊(寛政2年に吉原の遊女菊園を娶った)と版元蔦屋重三郎の絵。蔦重のせりふに「代作と直作は艸稿が変はると申せば、偽作は受取りません」とあるのは寛政4年刊『実語教幼稚講釈』のことをさすとされる。

12. 諺下司話説(ことわざげすのはなし) 3巻合1冊 099.5/87-11//D

蔦屋重三郎刊。下巻絵題簽存。爺と婆が川から流れてきた芋を食って若やぎ、「天上天下唯我屁く尊」と言っ
て生まれた放屁男(花咲男)を中心とした尾籠なゲスの話。展示個所(14ウ・15オ)は、花咲男の曲芸ならぬ曲屁の数々を、臭屁の判官音義公に披露しているところ。

13. 東海道五十三駅 / 人間一生五十年 凸凹話(たかびくはなし) 3 巻合 1 冊 913.57/12//H

薦屋重三郎刊。人間の一生五十年を東海道中の名物に見立てた話。展示個所（1 ウ・2 オ）は、絵草紙の版元薦屋重三郎が、「先生、家にござればよいが」と不安を覚えながら、山東庵を訪れて、草紙の趣向を伺う場面。薦重は長羽織で通人風の出で立ちである。



14. 式刻価万両回春(いっこくあたえまんりょうかいしゅん) 3 巻合 1 冊 913.57/SA1-13//H

薦屋重三郎刊。袋入本（良質な紙に刷って合本にしたもの）。袋存。袋（横長の包み紙で本をくるむ。上下はあく形となる）の表面が貼り付けられて残ったもの。題名は「春宵一刻値千金」と医書『万病回春』のもじり。「持たが病」「貧の病」「恋の煩い」「芭蕉風（破傷風のもじり）」などさまざまな病を解説する。

15. 五体和合談(ごたいわごうものがたり) 3 巻合 1 冊 913.57/SA1-78//H

鶴屋喜右衛門刊。人体の各部分が擬人化されて騒動を起こすが、最後は人体の真ん中に住む「臍（へそ）」隠居が和睦を調える。展示個所（10 オ）は、手島堵庵の心学書『五体和合／臍隠居』の影響が指摘される場面。この場面はのちに、文化 14 年刊『気替而戯作問答』でも焼き直される。棚橋正博「山東京伝処女作考」（『黄表紙の研究』）参照。

16. 這奇の見勢物語(こはめずらしいみせものがたり) 3 巻 3 冊 913.57/SA1-79//H

薦屋重三郎刊。絵題簽完。画面の右上の小さなコマに実際の見世物を描き、現実世界の奇妙な人々を対応させる趣向。展示個所（13 ウ・14 オ）「ちんぶつの見せもの」は、右上に人魚・両頭の蛇などを描き、右下には実在した日本橋十軒店の雛人形屋「面屋」の置き看板を写しているとされる。「六そくのかご」「小ばんのぬけがら（夕霧の文・伊左衛門の小判の抜殻）」「むすこの油」は吉原で金を使い果たし、親に搾られる放蕩息子への教訓である。

17. 延命 / 長尺 御詠染長寿小紋(おんあつらえぞめちょうじゅごもん) 3 巻合 1 冊 913.57/SA1-81//H

薦屋重三郎刊。題名は詠え染め丁子小紋のもじり。造化の神が多く命を仕入れて命の間屋をしているが、その命はすべて物差しのような棒に見立てられている。長寿の長い命を授かっても、命を棒にふったり、酒や女で命を削る人もいるもの（6 ウ・7 オ）。

18. 通氣智之銭光記(つきじのぜんこうき) 3 巻合 1 冊 913.57/20//H

鶴屋喜右衛門刊。「英王堂蔵書」「臨風文庫」印。本年鶴屋板京伝作黄表紙四種は春夏秋冬の四季に配され、本作はそのうち春に当たる。上巻絵題簽右上の提灯の中に「春」とあるのが確認できる。通常の黄表紙の題簽が縦長であるのに対して、横長の大型方形絵題簽が用いられる。表紙下部には、親犬一匹子犬二匹と隣に「小さつ便用」と刷られている。上下を合わせて表紙全体を一枚絵として鑑賞できる構図となっている。

『増補青本年表』には、「始め上紙摺三冊を合巻にして、表紙も上の黄表紙に犬を墨摺にしたり、是れ合巻の権輿とも謂ふべき歟。鶴屋の本此時より外題を横に長き形とす」とあるのとほぼ同様で、草双紙の装訂の変遷を考える上で貴重なものである。

通常の黄表紙の表紙が柔らかい紙を用いるのに対して、本書は硬い紙を用いる。本作の装訂の意義は、佐藤悟「草双紙の造本形態と価格——半紙本型草双紙の意義——」（『近世文藝』56）参照。

題名は、歌舞伎役者初代坂東善次の通称「築地の善好」に和算書『塵劫記』を言い掛けたもの。パネル展示個所（12 オ）は、「かけざん苦々のかず」とあり、市川白猿の似顔絵が描かれる。

19. 諸色 / 買帳 呑込多霊宝縁起(のみこんだれいほうえんぎ) 3 巻合 1 冊 913.57/16//H

鶴屋喜右衛門刊。上・中巻絵題簽存。通常の「黄表紙」仕立て。前書と同じく春夏秋冬の四季に配され、本作はそのうち夏に当たる。上巻絵題簽右上の提灯の中に「夏」とあるのが確認できる。表紙下部に、親犬一匹子犬二匹、「小さつ便用」と刷られているのも共通するスタイルである。さまざまなこじつけのある「飛んだ霊宝」を見ることができる。

20. 怪談摸摸夢字彙(かいだんももんじい) 3 巻合 1 冊 913.57/SA1-80//H

薦屋重三郎刊。本屋の催促により、一夜漬けの急作、もっぱら丑三つ時に案じた化物の本と京伝は言い訳するが、苦し紛れの化物頼みは江戸の戯作者にはよくあること。展示個所（4 ウ・5 オ）には、竹の串を刺され、鍋の蓋の上で叩かれ、唐辛子味噌を塗られた恨みで、ただぶるぶるするばかりの「蒟蒻の幽霊」、「親父は十面（渋面）、鼻は五面（御免）」の「十面のおやぢ」。

21. 作者胎内十月図(さくしゃたいないとつきのず) 3 巻合 1 冊 913.57/SA1-18//H

鶴屋喜右衛門刊。絵題簽完（中巻絵題簽は切断あり）。草双紙の種を孕むように浅草の因果地蔵に願掛けする作者京伝、地蔵から授かった黄色い臭い玉を呑むと腹に作の種を懐胎する。案じに苦しみながらも、10 月にめでたく「板木（はんぎ）やア」と泣く三つ子の臭草紙を産み落とすのであった（14 ウ・15 オ）。なお本作には、京伝の後妻百合が登場する。

22. 薩摩下芋兵衛 / 砂糖団子兵衛 五人切西瓜斬売(ごにんぎりすいかのたちうり) 3 巻 1 冊 913.57/18//H

薦屋重三郎刊。袋入本。袋・題簽欠。巻頭「引首」5 丁のあとに、封切紙が残る。題名は歌舞伎「五大力恋緘（ごだいきこいのふうじめ）」のもじりで、角書も歌舞伎の役名「勝間源五兵衛」「笹野三五兵衛」のもじり。食べ物尽くしの異類騒動物。展示個所（11 ウ・12 オ）は、下芋兵衛が西瓜の五人切をする場面。

23. 四遍摺心学草紙(しへんずりしんがくぞうし) 曲亭馬琴作 3 巻合 1 冊 913.57/TA1-60//H

薦屋重三郎刊。題名は、山東京伝『心学早染草』『人間一生胸算用』『堪忍袋緒ゞ善玉』に続く善玉悪玉シリーズの四編目ということから。京伝鼻の「狂言和尚」が狂言回しとなって、善玉悪玉に限らず、さまざまな珠が紙上を駆け回る。

24. 曲亭一風京伝張(きょくていいっぱうきょうでんばり) 曲亭馬琴作 3 巻合 1 冊 913.57/TA1-62//H

薦屋重三郎刊。煙管（きせる）と煙草入れの恋物語。「京伝見世の商品に取材、宣伝の意をあらわす」（水野稔『山東京伝年譜稿』）。展示個所（2 ウ・3 オ）には、右に巴山人印と「山東正舗」の文字が染め抜かれた暖簾が見え、左奥で扇面に揮毫しようとしている京伝鼻の京伝が描かれる。



洒落本（しゃればん）

—遊里を舞台にした短編小説—



享保期(1716～36)後半から始まり、文政(1818～30)ころまで数多く刊行された、遊里に取材する短編の小冊子。遊客・遊女などの姿態言動を、会話を主とした文章で写實的に描き、かんたんな小説的構成をとるものが多い。「洒落」とは、遊里を中心に生まれた「通^{つう}」という美的生活理念を軸に、人間の言動の滑稽味を描くことを意味する。最初は中国の艶史類^{えんし}をまねて、遊里の情景風俗を漢文で叙述するところから始まり、やがて会話本位の新しい文体による描写が、宝暦(1751～64)ごろに確立された。さらに明和7年(1770)の『遊子方言^{ゆうし ほうげん}』などにおいて、細密な写実手法を用い、類型的な性格描写による小説的構成が完成される。

安永・天明期(1772～89)に全盛を迎え、江戸市中の遊里を対象として、微細な知識を提示する「うがち」の手法が用いられる。天明半ばに山東京伝が登場し、鋭い観察とすぐれた表現描写によって、『通言総籙^{つうげん そうまがき}』(1787)、『傾城買 四十八手^{けいせいかいしじゅうはって}』(1790)ほか多くの傑作を出したが、寛政の改革によって処罰され、洒落本は一時衰えた。

(世界大百科事典「洒落本」項(水野稔氏執筆)から抜粋)

25. 息子部屋(むすこべや) 1冊 092.5/58-3//H

薦屋重三郎刊。京伝の洒落本処女作。全12条から成る遊興論を説いた書だが、うち半分は『魂胆惣勘定』(宝暦4年刊)と『古今吉原大全』(明和5年刊)との記述を借用している。

題名の「むすこべや」とはモスクワ産の上等のなめし革「ムスコビヤ」のもじりで、女郎たちが客の噂話をするのが身仕舞部屋なら息子株が女郎の魂胆を話すのは息子部屋だという洒落。

本書ほか、展示番号27、37、38、39の洒落本に弟の京山が加えた朱筆は、嘉永4年に幽篁庵こと合巻作者で本田侯の藩士の関亭伝笑の需に応じたものであり、水野稔が「京伝洒落本の京山注記」(『江戸文芸とともに』)にて紹介している。その書き入れによれば、文化14年(1817)に伊勢山田を訪れた京山は、洒落本好きの当地の女郎から『息子部屋』を読んで感服した旨を伝えられたという。

26. 客衆肝照子(客衆肝膽鏡)(きゃくしゅきもかがみ) 1冊 099.3/90//D

薦屋重三郎刊。役者身振りと台詞尽し絵本の『役者氷面鏡』(明和8年刊)に倣い、振袖新造から色男まで吉原を往来する人々19種の姿と台詞を写した書。作中の絵は京伝自身が描いたもの。漢文序を寄せた尻焼猿人とは酒井抱一のこと。作中、当時の女郎や男芸者ほか実在した人物の名前を出した穿ちが散りばめられ、後の京伝洒落本の特徴である事実に則した描写の原型を見ることが出来る。

展示品の表紙に貼付けられているのは旧蔵者の書き入れによれば袋の一部であるというが、従来知られている袋とは異なる。また、別の旧蔵者によって台詞が書き加えられている個所が散見される。

27. 総籙(そうまがき) 1冊 092.5/58-4//H

薦屋重三郎刊。書名は、籙が天井まで達している最高級の女郎屋を総籙と言うことによる。

自身の黄表紙『江戸生艶気樺焼』(天明5年刊)の好評を受けて、仇気屋ゑん次郎ほか同書の登場人物をそのまま登場させている。内容は北里喜之介宅にて廓の噂話に終始する前半と、吉原松葉屋の世界を穿った後半とに別れる。展示品に施された京山の書き入れや、大田南畝が松葉屋の女郎であった妾しづからの聞書を記した『松楼私語』(天明7年成)を参照すると、京伝の穿ちの細かさがうかがえる。

28. 総籙(そうまがき) 1冊 913.53/SA1-4//H

南畝と加保茶元成の書き入れを笠亭仙果が転写した本から林若樹が抄写した本。水野稔「京伝点描」(『江戸文芸とともに』)にて紹介されている。

29. 総籙(そうまがき) 1冊 099.5/87//D

鶯亭金升旧蔵本。水野稔「洒落本『総籙』のよみかた」(『江戸文芸とともに』)にて紹介される。

展示品には京伝が「御すいさつあれかし」とぼかした喜之介と相方女郎との口舌の様子について、「いゝとれぬ喜之助がびやうぶの内の口舌、いかにも此本の目ぬきといふべき処なり」といった旧時の読者の感想が書き入れられている。

30. 古契三娼(こけいのさんしょう) 1冊 099.5/87-2//D

31. 古契三娼(こけいのさんしょう) 1冊 099.3/88//D

鶴屋喜右衛門刊。30は『洒落本大成』第13巻の底本。題名は画題としても有名な中国の故事「虎溪三笑」のもじり。

吉原のおよし、深川仲町のお仲、品川のお品という女郎上がりの三名が、それぞれの廓事情を語り、比較する内容。水野稔「西鶴と京伝」(『江戸小説論叢』)によって西鶴の文体からの影響があることが指摘されている。

32. 傾城觸(けいせいけい) 1冊 099.3/86//D

蔦屋重三郎刊。松葉屋ほか全六軒の女郎屋に所属する女郎の長柄傘、箱提灯の合印、定紋と替紋、手跡を載せ、性格や得意の芸等を記した案内書風の内容。書名と形式を『俳諧觸』(明和5年刊〜)に仰いでいる。巻末には松葉屋、丁子屋、角玉屋、扇屋の廓言葉を載せる。

展示個所、扇屋花扇の番頭新造「きくぞの」は後年京伝の妻となる女性。

33. 新造図彙(しんぞうずい) 1冊 913.53/SA1-2//H

34. 新造図彙(しんぞうずい) 1冊 099.3/86//D

蔦屋重三郎刊。33の袋は『洒落本大成』第15巻にて巻頭カラーで紹介されている。

『訓蒙図彙』(寛文6年刊)をもじって、絵入りの辞典風に吉原の諸事を取り上げ、戯画化した作品。

35. 志羅川夜船(しらかわよぶね) 1冊 099.3/90//D

伏見屋善六刊。「武左の初会」、「素見の高慢」、「西岸の世界」の三章立てだが、水野稔「京伝洒落本における写真とその技法」(『江戸小説論叢』)によって「武左の初会」に先行洒落本『百安楚飛』(安永8年刊)が利用されていることが指摘されている。

冒頭に「当世吉原の客は七分武士にして三分町人なり」とあり、天明7年(1787)の火災による仮宅営業から元地に戻って間もない当時の吉原の様子がうかがえる。また、「西岸の世界」にて最下層の河岸見世での遊びを描くことで新境地を開いた作品とも言える。

36. 繁千話(しげしげちわ) 1冊 099.3/88//D

多田屋利兵衛刊。題名は近路行者(都賀庭鐘)の読本『繁野話』(明和3年刊)のもじり。半可通馬骨が洒落本のお決まり通り女郎に振られるまでを描いた作品。吉原細見に擬した目録が特徴的。

作中度々登場する白話は『俗語解』等の白話語彙集にも見られる語彙で、当時こうした言葉を使うことが通人気取りの客たちの間で流行していたことがうかがえる。

37. 傾城買四十八手(けいせいかいしじゅうはって) 1冊 092.5/58-5//H

薦屋重三郎刊。振鷺亭の洒落本『自惚鏡』(寛政元年刊)の趣向を踏襲して、「～手」と題し、特定の立場の客と女郎とのやりとりを描き、京伝自身の短評を添えた作品。巻末には「西行も末見ぬ花の廓哉」という京伝の発句が載る。洒落本の評判記『花折紙』(享和2年刊)にて立役の巻頭に挙げられ「当時流行のしやれほん小冊の最第一」と絶賛されている。

展示個所の京山書き入れによって、口絵の風俗が寛政(1789～1801)年間中のものであることと、書き入れ当時の裾へと変化していった経緯が説明されている。

38. 仕懸文庫(しかけぶんこ) 1冊 092.5/58-2//H

薦屋重三郎刊。袋に「教訓読本」と銘打ち、登場人物名は曾我物のそれを利用して舞台を鎌倉大磯に置き換える等、出板統制への配慮がうかがえるが、そうした努力も空しくこの年に出板された洒落本三作によって京伝は処罰される。京山の書き入れによれば、旗本の次男の姿を写した人物を登場させたことも処罰の理由の一部となったという。

京伝唯一の深川を舞台とした作品で、書名は深川にて着物を仕懸と言い、仲町では着替えとなる仕懸の入った文庫を持たせて客のもとへ行く風習があったことを踏まえる。全体に深川風俗の穿ちが散りばめられ、当地特有の割床遊びの様子を描写するほか、後半は主人への義理と間夫への真情との間で揺れる女郎の葛藤が描かれる。

39. 娼妓絹簾(しょうぎきぬぶるい) 1冊 092.5/58-1//H

薦屋重三郎刊。書名は『碁立絹簾』(天明7年刊)に由来する。

展示個所の京山書き入れによって、作中にて「風流の人」と評される客が詠んだ「鶏鳴曲」という七言絶句が、京伝の友人で儒者の伊藤蘭洲の作であることが分かる。

40. 錦之裏(にしきのうら) 1冊 099.5/87-10//D

薦屋重三郎刊。夜の吉原を「錦の表」とし、その華やかさは「今まで多くあり来りの小冊で御らうじろ」と述べた上で、『廓文章』の夕霧伊左衛門の世界を借りつつも、営業前の昼の吉原を時間を追って描いた点が新しい作品。



26 客衆肝照子(客衆肝膽鏡)の表紙



吉原細見（よしわらさいけん）

—遊廓のガイドブック—



江戸の吉原遊廓の案内書。古くは細見絵図（細見図）と称し、一枚摺りの絵図に、各家の抱えの女郎名、位付けから、くつわ（女郎の抱え主）、揚屋、茶屋、その他廓中の商人、芸能人までを記した。現存最古のものは、元禄2年（1689）刊の『絵入大画図』である。享保年間（1716～36）から冊子型となる。巻頭には廓中の絵図を掲げる。1年に1部以上刊行され、明治初年に及んだ。地本問屋蔦屋重三郎が版元となつて四方山人（大田南畝）、朱楽菅江、そして京伝などの戯作者が序文を執筆しており、文学的にも注目されている。

（世界大百科事典「吉原細見」項（宗政五十緒氏執筆）から抜粋）

41. 新吉原細見（しんよしわらさいけん）1冊 個人蔵

蔦屋重三郎刊。題簽「新吉原細見 毎月改」。天明3年春より、吉原細見は蔦屋重三郎の独占刊行となった。いわゆる「蔦重ブランド」が確立した記念碑的出版物である。朋誠堂喜三二・四方山人（大田南畝）という当代を代表する戯作者が序跋をかざり、末尾には朱楽菅江の祝言狂歌「五葉ならいつでもおめしなさいけんかはらぬちよのまつのはんもと」が載る。巻末「耕書堂蔵板目録」には、浮世絵師北尾政演の名作「青楼名君自筆集」（「青楼遊君之容貌 大絵錦摺百枚続」）の広告が載る。



42. 新吉原細見（しんよしわらさいけん）1冊 384.9/40/H

蔦屋重三郎刊。題簽「新吉原細見 毎月改」。天明5年は京伝の洒落本初作『息子部屋（令子洞房）』の出版された年。摺物「廓の雅室」も同年刊であるので、比較対照されたい。

43. 新吉原細見（しんよしわらさいけん）1冊 384.9/42/H

蔦屋重三郎刊。京伝は寛政2年春～寛政6年春の間、『新吉原細見』の序を担当している。

44. 吉原新宅普請／遊君座敷正写 廓の雅室（さとのわかむろ）2枚 個人蔵

堀屋九郎兵衛刊。一枚摺。天明4年（1784）4月16日の吉原全焼後、新宅となった吉原の著名な遊女の部屋の様子を詳細に記したもの。

京伝と狂歌

京伝ははじめ身軽^{み、がろのおりすけ}折輔と号し、天明3年(1783)の『狂文宝合記』^{たからあはせのき}にその名が見える。この狂名には、武士よりも町人の自由さを喜んだ、彼の態度が表現されている。天明5年頃までこの狂名が用いられたが、それ以後は作者名の「山東京伝」を、狂歌にも使用した。

はじめは、友人鹿都部真顔^{しかつ、べのま、がお}(1753~1829)の社中に属したらしい。しかし、京伝の狂歌には、真顔よりも蜀山人^{しよくさんじん}(大田南畝。1749~1823)の影響が大きいとされる。

京伝の狂歌は、その文章に比較すると遜色があり、彼の狂文も狂歌よりは優れている。あれ程に多側面で遊里通でもあった彼としては、狂歌にもよほどの特色があつてよさそうであるが、案外に平凡な作が多い。
(小池藤五郎『山東京伝の研究』「狂歌師としての京伝」から抜粋)

45. 狂歌觸初編(きょうかけいしょへん)1冊 式亭三馬編 911.19/40//H

万屋太治右衛門刊。『俳諧觸』にならって、当時の狂歌点者の住所・狂歌・点印、高点歌・筆跡を紹介する。

「戯作者之部」には、烏亭焉馬^{うていえんば}・桜川慈悲成^{さくらがわじひなり}・曲亭馬琴・山東京伝・式亭三馬が載る。

41オに「山東庵 京橋南街 醒世老人京伝」と狂歌、41ウに印譜と「取事凡近 発義勸懲」の筆跡がのる。



46. 狂歌師細見(きょうかしさいけん)1冊 平秩東著作 911.19/43//H

狂歌師の人名録。題簽「狂歌師細見 毎月不改」。明誠堂主人序・四万山人跋・のけらうんこうの細見託言の狂歌。序に「今の狂歌の風(ふう)、よし原細見の絵図になぞらへ、歌人の狂名をかき集て」とあるように、体裁・内容すべてが、天明三年吉原細見のもじりとなっている。伝本は水野本のみ。8オに「おり介」(「身軽の折輔」が京伝の狂名)「まさのぶ」の名が見え、9ウの戯作者之部に京伝、画工之部に北尾政演の名が載る。

47. 四方の巴流(よものはる)1冊 狂歌堂真顔撰 911.19/45//H

狂歌堂真顔による狂歌春興帖(寛政7年に大田南畝の四方赤良から四方姓を継ぐ)。題簽「四方の巴流」。「五明楼花扇」(吉原江戸町一丁目扇屋抱え花扇)による扉書、「路考」(三代目瀬川菊之丞)、「市川団十郎」(五代目市川団十郎)の挿絵とともに、京伝による挿絵と狂歌一首が載る。遊女・役者と並ぶ江戸名物としての文化人京伝の立ち位置がうかがえよう。『江戸狂歌本選集』第四巻に、京都大学文学部頼原文庫本による翻刻所収。



合巻(ごうかん)

—絵入りの中・長編小説—



江戸時代の大衆挿絵文学である草双紙の一種で、通俗性と伝奇趣味の濃い絵入り小説である。毎ページに挿絵があり、その周囲を細字の仮名本文で埋め、絵と文とは有機的な関係をたもっている。表紙には、内容を暗示する図柄の錦絵摺を用いる。先行する黄表紙が、筋を複雑にしたため内容が膨張し、5丁（10ページ）で一冊という単位を大きく逸脱・超過するようになった。そこで製本を簡便化するため、数冊が適宜合冊されるようになり、この体裁を「合巻」と称した。普及したのは文化3・4年（1806・07）以降で、式亭三馬の『雷太郎強悪物語』^{いかづちたろうごうあくものがたり}その他が推進力となったらしい。当初は山東京伝の活躍が顕著で、彼は草双紙に読本の手法を導入して、題材を敵討ち物からお家騒動物へと展開させた。京伝の没後には長編化が進み、柳亭種彦の『正本製』^{しょうほんじたて}や『修紫田舎源氏』^{しゆむらさきいなか げんじ}、曲亭馬琴の『傾城水滸伝』^{けいせい}や『新編金瓶梅』などが流行した。

（新潮日本文学辞典「合巻」項（鈴木重三氏執筆）から抜粋）

48. 岩井櫛条野仇討(いわいぐしくめののあだうち)半紙本7巻合1冊 913.57/SA1-7//H

西村屋与八刊。この時期の合巻は、半紙本の「上紙摺（じょうしずり）」、中本の合巻仕立て、同じく中本の黄表紙仕立ての三種の体裁で出版された。印刷の順や値段の高下もこの順序である。半紙本の合巻は紙質がよく印刷も鮮明な特製本と考えてよい。展示個所（23ウ・24オ）の水死体の図は、京伝合巻のなかでも、特に陰惨な絵として知られる。そののち、文化5年（1808）9月の町奉行からの伝達「合巻作風心得之事」で、「水腐之死体」その他殺伐な表現をしないよう求められることになった。

49. 岩井櫛条野仇討(いわいぐしくめののあだうち)中本7巻合1冊 913.57/SA1-7/B/H

西村屋与八刊。中本合巻仕立て。題名の「岩井櫛」は、四代目岩井半四郎の当たり役「三日月お仙」にちなんで作られた櫛。「条」は、五代目岩井半四郎の前名「条三郎」に由来するとされる。本書の絵題簽は、五代目岩井半四郎（前編）と五代目松本幸四郎（後編）が配される。

50. 累井筒紅葉打敷(かさねいづつもみじのうちしき)8巻2冊 913.57/SA1-39//H

西村屋与八刊。羽生村累の怨霊物語。口絵1ウ・2オは、絹川与右衛門・累の絵であるが、上に芭蕉の高弟其角（きかく）の「片足はやつし候也小田の雁 其角」の短冊の縮図模写が載る。「北越塩沢鈴木牧之所蔵短冊」とあるのが興味深い。鈴木牧之『北越雪譜』出版には、京伝・京山の深い関わりがあったのはよく知られている。『近世奇跡考』にも描かれている百万遍の図もある（34ウ・35オ）

51. 松梅竹取談(まつとうめたけとりものがたり)半紙本前帙上冊3巻1冊 913.57/SA1-4//H

西村屋与八刊。半紙本前帙上冊のみの端本であるが、非常に凝った趣味的な造本の例である。古風な丹表紙で、拓版画風に題名の「松」の木が描かれた副題簽には「松ト梅竹取物語／前帙上冊」とあり、左肩縦長題簽には「山東京伝」「歌川国貞」「永寿」（版元永寿堂西村屋与八のこと）「筆硯□□」とある印が印譜風に配置されている。

52. 松梅竹取談(まつとうめたけとりものがたり)15巻3冊 913.57/SA1-4/B/H

西村屋与八刊。15巻75丁の京伝合巻最長編である。角書に「八百屋於七伝」とあり、八百屋お七に『竹取物語』を付会して、天人お七の趣向を取り入れたもの。虫眼鏡で見た、蚤・虱・蚊・赤棒振に襲われる図（22

ウ・23 オ)、越中滑川大蛸の図(47 ウ・48 オ)、菱川流小町踊りの古図(57 ウ・58 オ)など、長編であるので、挿絵も印象的なものが数多い。

53. 糸桜本朝文粹(いとざくらほんちょうぶんずい) 6巻合1冊(校合本) 913.57/SA1-38/B/H

京伝自筆校合本。表紙に「糸桜朝出来 再校合 口上 再校合仕、なほらぬ所、さげ札二仕、禁忌のなほしハ、別て御ねん入可被下候 西与様 京伝」とある。いわゆる再校であるから、直しは少ないものの、版本の成立過程がうかがえる貴重な資料である。

朱字訂正は次の五か所。

- ① 5 オ「半時黒平」のルビ「べい」の「べ」の濁点に朱で「とるべし」 朱で欄外「にぎりあつてハ禁忌なり にぎりとるべし」(半紙本で訂正)
- ② 5 ウ「豊後国大友家臣石塚綱五郎」の「大友家臣(おほとものかしん)」に朱で囲み「とるべし」 朱で欄外「(此)四字けづりとるべし 口友家臣 禁忌也」(半紙本で訂正)
- ③ 10 オ「おくがたい」(後ろから6行目)の、不要な「い」の削去の指示 朱「とるべし」 朱で欄外「(一字)けづりとるべし」(半紙本で訂正)
- ④ 18 ウ茶屋の看板「菱川」の文字 朱で抹消 朱で欄外「□□いろ白くしておくべし さしやいあり」(半紙本未訂正→中本訂正)
- ⑤ 23 ウの3行目「きんのつだ」の「だ」に朱で四角の囲み 朱で欄外「かやふに□になほすべし □つてハ□り□□度候」(上部切断のため意不明、中本「きんのつば」に訂正)

54. 糸桜本朝文粹(いとざくらほんちょうぶんずい) 12巻3冊 913.57/SA1-38//H

西村屋与八刊。改装本。題名は本作の世界である浄瑠璃「糸桜本町育」と漢詩文集『本朝文粹』による。画工鳥居清峯は執筆時23歳、文化12年(1815)に鳥居家五代目を継いでからは版画から退く。若手ながら歌川豊国にも劣らない絵の技量で、本作の挿絵も京伝合巻中の佳品といつてよい。

55. 朝茶湯一寸口切(あさちやのゆちよっとくちきり) 6巻2冊 913.57/SA1-62//H、913.57/SA1-62/B//H

鶴屋金助刊。摺付表紙前編は、二代目市川団十郎の矢の根の人形図、後編は、初代尾上松緑の老婆長壁(おさかべ)の図。序文に歌川豊国の亡父(人形師倉橋五郎兵衛)の形見の、二代目市川団十郎矢の根に扮する人形を見て趣向の種としたとする。紙上で「一寸徳兵衛」の歌舞伎を見るような、演劇趣味にあふれた作である。

56. 今昔八丈揃(いまはむかしはちじょうぞろえ) 6巻2冊 913.57/SA1-66//H

伊賀屋勘右衛門刊。半紙本。浄瑠璃「恋娘昔八丈」に取材した作。一卷目を序文・口絵にあてて、残り5巻を浄瑠璃の五段組織に近づこうとする構成は、この時期の京伝合巻の典型といえる(水野稔「京伝合巻の研究序説」『江戸小説論叢』)。

57. 今昔八丈揃(いまはむかしはちじょうぞろえ) 6巻合1冊 913.57/SA1-2//H

伊賀屋勘右衛門刊。中本。水野本には、半紙本と中本の合巻仕立て両方が所蔵される。半紙本のほうが早い摺りであるので、比較されたい。前編見返しの紋づくしや序文の版面は、歌舞伎の役割番付(紋番付)の様式を模したもの。

58. 二人虚無僧(ふたりこむそう) 9巻3冊 913.57/SA1-64//H

西村屋与八刊。上編摺付表紙に手擦れがあるものの、中本三冊本の原装をたもつ。上編見返しの西洋風の

異国童子のデザインは、『装剣奇賞』巻六「人形革図」による。口絵4ウ・5オには「職人尽絵巻物」からの縮図を載せ、京伝はしばしば舶来趣味と好古趣味を併存させている(鈴木重三「京伝と絵画」『絵本と浮世絵』)。江の島児が淵伝説と梅川忠兵衛をないまぜた作で、題名は梅川忠兵衛の二人が虚無僧姿に身をやつすことに由来する。

59. 薄雲猫旧話(うすぐもがねこのふること) 6巻合1冊 913.57/SA1-60//H

岩戸屋喜三郎刊。吉原京町三浦屋抱えの遊女薄雲とその飼猫の奇談に、『近世奇跡考』巻二で考証した水木辰之助の鎗踊り猫の狂言などをないまぜた作。口絵1ウ・2オには、『酉陽雜俎』による「猫之目睛(くろめ)にて時を知る」の図が載る。

60. 安達原氷之姿見(あだちがはらこおりのすがたみ) 6巻合1冊 913.57/SA1-59//H

鶴屋喜右衛門刊。歌舞伎「奥州安達原」などで知られる安達ヶ原の鬼女伝説の物語。摺付表紙は、五代目松本幸四郎・二代目沢村田之助(前編)、七代目市川団十郎・五代目岩井半四郎の役者似顔絵で描かれる。下部は古風な歌舞伎舞台図。

61. 濡燕子宿傘(ぬれつばめねぐらのからかさ) 6巻合1冊 099.2/71//D

葛屋重三郎・鶴屋金助刊。石橋思案・鶯亭金升旧蔵。角書に「不破名古屋」とあるように、文化3年(1806)刊の京伝作読本『昔話稲妻表紙』と同じく、近松作浄瑠璃『傾城反魂香』の名古屋山三と不破伴左衛門の世界を描く。題名は、口絵・本文中にたびたび引用される「傘(からかさ)にねぐらかさふよぬれ燕(つばめ)其角」の句による。本作の序文末尾にも見られるように、この時期の京伝合巻には、しばしば『骨董集』の著述のいとま」と記される。

62. 磯馴松金糸腰蓑(そなれまつきんしのこしみの) 6巻合1冊 913.57/SA1-54//H

丸屋甚八刊。「むくちなれども異見を頼まれ、仏ざらひも寺参に、抹香くさき親父となるこそかなしけれ」と、執筆時53歳、没前3年前の京伝の生涯の旧懐が述べられた序文で知られる。鈴木春信の浮世絵や『根無草』『金々先生栄花夢』を愛玩した少年時代、そしてこのごろは、式亭三馬の戯作を繰り返し見て、「七世の孫」に会う心地だと賞賛する。水野稔「京伝と馬琴」(『江戸小説論叢』)参照。

63. 袖之梅月土手節(そでのうめつきのどてぶし) 7巻合1冊 913.57/SA1-48//H

鶴屋金助刊。遺稿作。執筆は文化13年(1816)2月(序年記)。陰謀と敵討を素材としつつ、「袖之梅」「土手節」といった吉原の事物、考証趣味をも取り入れた作で、「作者晩年の合巻の諸特徴が凝縮している」と評される(水野稔「京伝合巻の研究序説」『江戸小説論叢』)。

64. 気替而戯作問答(きをかえてけさくもんどう) 6巻合1冊 913.57/SA1-49//H

森屋治兵衛刊。遺稿作。文化13年閏8月稿成(序年記)。滑稽物。おもに京伝自身の旧作黄表紙の継ぎ接ぎであり、内容がこの時期の京伝合巻としては異色であるため、京山による追善作である可能性が指摘されている(佐藤至子「山東京伝の合巻『気替而戯作問答』について——京山による追善作の可能性——」『語文』132輯)。

65. 家桜継穂鉢植(いえざくらつぎほのはちのき) 6巻合1冊 913.57/SA1-51//H

和泉屋市兵衛刊。京山序文によると、前編3冊は、文化13年(1816)5月18日に筆を採った京伝の戯作の絶筆。後編3冊は京伝の草稿がなかったため、版元の求めに応じて、京山が補綴したものである。前後編表紙(五代目岩井半四郎の揚巻と七代目市川団十郎の助六)と前編挿絵は歌川豊国画であるが、後編

挿絵は豊国方で間に合わなかったので、「二日一夜に」3冊（15丁）分を溪斎英泉が画いた。2ウ・3オに「京伝自筆草稿（したがり）」が載る。没後6年、京伝の最後の遺稿作の出版となった。

66. 奴勝山愛玉丹前(やっこかつやまむすめたんぜん) 3巻1冊 山東京山作 913.57/SA2-3//H

津村屋三郎兵衛刊。見返しに「京伝序文／豊国題画」とあるように、京伝の序文と歌川豊国の口絵2丁が巻頭を飾る。序文には「家弟京山が作せし娘丹前といふ絵草紙に、口絵の案じをたのむ」と版元より依頼されたことを記す。片々たる小冊であるが、伝本は水野本のみ。『山東京山伝奇小説集』の底本。

67. 山洞流悪玉狂言(さんとうりゅうあくだまきょうげん) 3巻1冊 浮世喜楽（橋本徳瓶）作 099.2/71//D

西村屋与八刊。『堪忍袋緒善玉』の影響作。口絵1ウ・2オに、「此図は寛政の始め、京伝先生の著述『堪忍袋緒締善玉』といへる草紙の後編の巻頭に出たるを其倣摸写して、好事の一笑にそなふるのみ」と、多少のアレンジを加えた悪玉踊りの図を載せる。橋本徳瓶は筆耕が本職で、余技として合巻を中心とした戯作をものした。京伝・京山作品の筆耕も数多くつとめている。



61 濡燕子宿傘 の表紙



京伝の読本(よみほん)

—江戸読本を創始—



寛政11年(1799)に前編が刊行された『忠臣水滸伝』は、浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』の世界に、中国小説『水滸伝』の趣向を取りあわせたもので、表現の斬新さも好評であった。この作品は、京伝の読本初作であるばかりでなく、江戸の地を中心とした「後期読本」の出発を告げるものともなった。

その後京伝は、『復讐奇談安積沼』(享和3年・1803)や『優曇華物語』(文化元年・1804)において、民話・伝説・巷談などを大きくとり入れ、新しい江戸読本の典型を示している。さらに『昔話 稲妻表紙』(同3年)では、演劇で知られた人物や説話を、お家騒動のなかに取り入れて、競争者の曲亭馬琴とは異なる独自の境地をひらいた。

しかし、後続の『善知安方忠義伝』(文化3年)や『梅花氷裂』(同4年)、『浮牡丹全伝』(同6年)などは、いずれも未完に終わった。『本朝醉菩提全伝』(文化6年)も意欲作であったが、構成力に欠ける京伝の弱点を示している。最後の努力を傾注した『双蝶記』(文化10年)では、得意とする演劇的構成・趣向を徹底させ、世話にくだけた表現を大胆にとり入れたが、世評は芳しくなかった。

馬琴にくらべて中国文学に暗く、学識の劣っていた京伝は、それらを有力な武器としておのれの地歩を固めた馬琴には抗しえなかったのである。

(日本古典文学大辞典「山東京伝」項(水野稔氏執筆)から抜粋)

68. 復讐奇談安積沼(ふくしゅうきだんあさかのぬま)5巻合1冊 913/S1-2//D

鶴屋喜右衛門刊。薄墨や丹が省かれており、少し後印ながら、摺りや状態は良い本である。展示個所(巻之二3ウ・4オ)は、祢宜町(ねぎまち)の芝居小屋の図で、浅井了意『東海道名所記』の挿絵を取り込んだもの(鈴木重三「京伝と絵画」『絵本と浮世絵』)で、京伝の考古趣味が反映されている。

69. 優曇華物語(うどんげものがたり)5巻7冊 913.56/SA1-3//H

鶴屋喜右衛門刊。各冊表紙に「平戸藩蔵書」の蔵書票が貼付されており、平戸松浦家(松浦静山)の旧蔵書。最終巻卷之五下に虫損があるものの、それ以外は現存最善本といってよい。『山東京伝全集』第15巻・大高洋司『読本善本叢刊 優曇華物語』の底本。近世前期に流行した丹表紙を模し、『近世奇跡考』の挿絵をも担当した喜多武清の古雅な味わいをもつ挿絵が印象的な読本である。前掲大高洋司解題で、本書の版下は『近世奇跡考』と同じく、「京伝その人の筆跡ともよく似た」字体で書かれた丁が多いことが指摘されている。

70. 善知安方忠義伝(うとうやすかたちゅうぎでん)5巻6冊 913.56/SA1-5//H

鶴屋喜右衛門刊。平将門の遺児如月尼と良門が帝位を窺う筋に、忠義の脇役として謡曲「善知鳥」の善知安方を配する。京伝読本のなかでは『桜姫全伝曙草紙』と並んで、世評のよかったもの。明大本は全体的に疲れのある本であるが、巻之三上10ウ・11オの挿絵の雨脚が垂直に降る薄墨版は、『山東京伝全集』第16巻の解題にいう「極初摺本」と同様に貴重なものといえよう。

71. 小説奇言(しょうせつきげん)5巻5冊 岡白駒訳 923/36//H

風月堂莊左衛門刊。「山東庵」の蔵書印があり、京伝あるいは京山旧蔵書。中国白話短編小説に訓点・傍訓を施した「和刻三言」(『小説精言』『小説奇言』『小説粹言』)の一。



京伝の滑稽本(こっけいぼん)

—絵画と文章のコラボレーション—



こっけいぼん
滑稽本は戯作の中でも、笑いと描写とに力点を置いた一群であり、文学史的な整理では、じつべんしやいつく
『東海道中 膝栗毛』(享和2年・1802)の刊行開始をもって、前期・後期の画期としている。京伝が滑稽本に才筆をふるったのは、おもに『膝栗毛』の刊行以前であるが、この時期は洒落本や黄表紙の流行に圧倒されて、いまだ滑稽本が明確なジャンルとして確立してはいなかった。

京伝には十余部の滑稽本があり、特にこもんざい(天明6年・1786)、えきやうだい(寛政6年・1794)、きみやうずい(享和3年・1803)などの滑稽絵本には、戯作者京伝・絵師政演という、彼の両面の才智をうかがうことができる。その他の滑稽本でも、挿画を効果的に用いたものが多く、文章を主体とするものは、『百人一首和歌始衣抄』(天明7年・1787)ほか数点にとどまる。

72. 初役金烏帽子魚(はつやくこがねのえぼしうお)1冊 913.57/SA1-24//H

薦屋重三郎刊。十返舎一九の画工としての初作。このころ一九は版元薦屋重三郎の食客となっていた時期で、翌寛政7年(1795)に薦重版黄表紙三作で作者としてデビューする。薦重店で京伝と一九は知り合ったものであろう。展示個所は、「昔話／歌舞妓講釈／講師酒肴軒」の講筵を描くが、講師の顔は京伝鼻の面影が感じられる。

73. 腹筋逢夢石(はらすじおうむせき)2冊 913.55/11//H

伊賀屋勘右衛門刊。初編・二編の2冊。『優曇華物語』と同じく「平戸藩蔵書」(松浦静山)の蔵書票貼付。三編を欠くものの、表紙・題簽・封切紙・本文すべて美しい状態を保つ。初印の最善本といえよう。鳥獣の身振り声色芸を描いた本作はすぐに大評判となり、時を置かず西村屋与八から京伝が賛を寄せる同趣向の豊国画の浮世絵が出版された(『寛政の出版界と山東京伝』)。

74. 小紋裁(こもんざい)1冊 913.55/12//H

白鳳堂刊。京伝の滑稽図案物の初作(水野稔『山東京伝年譜稿』)。展示個所(3ウ・4オ)は、「京伝案 北尾政演画(素石) 小紋式百五十有余品」とあり、上げギセルでこちらを窺う作者の顔、「あふむせき」「しんざうとしま」「おいらん小もん」「いんぐはあられ」。



75. 小紋新法(こもんしんぽう) 1冊 913.55/8//H

蔦屋重三郎刊。題名は『古文真宝(こぶんしんぽう)』のもじり。「小紋裁後編 小紋新法 京伝案 北尾政演画」とある楕円形の題簽が貼付される。袋の一部を切り抜いたものかと推測される(延広真治『小紋裁後編 小紋新法』——影印と註釈——(一))。

76. 小紋雅話(こもんがわ) 1冊 913.55/9//H

蔦屋重三郎刊。『小紋裁』の増補改題本(冒頭4丁を増補)。京伝序によると、題名は「もゝんがア」のもじり。展示個所は(3ウ・4オ)、「なべぶたつなぎ」「めくりかさね」「くまどりしぼり」「かぎ桐」「うなぎつなぎ」「口 / \ こもん」。



絵 本



77. 絵本宝七種(えほんたからのななくさ) 1冊 913.53/SA1-7//H

蔦屋重三郎刊。稀本。他に国会図書館蔵本と他1本が知られる。寛政3年刊『絵本福寿草』(北尾重政画)と同本で、政演によって彩色を改め出版された可能性が指摘される(『稀本あれこれ 国立国会図書館の蔵書から』)。展示個所(1ウ・2オ)は、京伝序に、蔦重から一小冊を示されて、「書名及び序文を乞」われたためその草紙を見るに、「七福神の遊び戯るゝ姿」に新年の吉兆を感じたとされる場面。



考証随筆

—後半生のライフワーク—



寛政3年(1791)の筆禍以後、京伝は文人としての新しい方向を模索し、近世初期の風俗や人物・絵画・演劇等の研究・考証への興味と関心を深めていく。享和3年(1803)に『近世奇跡考^{きせきこう}』の稿を起こし、翌文化元年に刊行した。そして文化11・12年(1814・15)には、『骨董集^{こつとうしゅう}』の上編3巻4冊を刊行したが、同書を完成させることはできなかった。晩年の京伝は、小山田与清^{ともしよ}の擁書楼^{ようしやうろう}に足繁く通っており、京伝の後半生は、戯作の執筆よりも、このような研究考証に主力が傾注されたのである。

(日本古典文学大辞典「山東京伝」項(水野稔氏執筆)から抜粋)

78. 近世奇跡考(きんせいきせきこう)5冊 個人蔵

大和田安兵衛刊。見返しには「醒醒老人著／武清先生画／瑞玉堂蔵版」とある。刊行された京伝の考証随筆の第一作。『骨董集』と並んで京伝の近世前期の風俗考証の成果を示す著作である。それまで書き集めた草稿より、「俗耳にちかき事いくばくを撰出(えりいだ)し」(凡例)たもので、『骨董集』が雅に近い題材に重きを置くのに対して、俗に重きが置かれている。現在でも、「後の世に今をいにしへとしてしたふ人」(同)のための有益な文献たりえている。

79. 骨董集(こっとうしゅう)3巻4冊 個人蔵

鶴屋喜右衛門刊。鶴屋版ながら少し後印本。天保7年(1836)に丁子屋平兵衛に求板される。『近世奇跡考』に次ぐ近世前期の風俗考証の第二作。文化11年(1814)に上之巻・中之巻、文化12年に下之巻前・下之巻後と二冊ずつ出版された。晩年の戯作序文の末尾に「骨董集著述のいとま」と記し、死の直前まで、小山田与清の擁書楼に足繁く通っていた京伝畢世の著述である。そのため京伝は骨董集と討死したと噂されるほどであった。その厳密な考証態度は、同じ戯作者の柳亭種彦に引き継がれた。宮武外骨『山東京伝』に次の狂歌が紹介されている。「古反故を骨董集にかきつめて見ぬ世の友ぞおほくなりぬる 醒々斎」。

80. 無垢衣考(むくいこう)1冊 210.09/SA1-1//H

京山私刊本。外題「無垢衣考」。文化十三年丙子之冬京山跋。「宝玲文庫」「浜和助」印あり。「京山亡兄の遺稿「むく / \ の小袖」をそのまま板刻し、『無垢衣考』と題して知友の間に配る」(水野稔『山東京伝年譜稿』)。



伝 記



81. 戯作六家撰(げさくろっかせん)1冊 岩本活東子著 913.5/141//H

山東京伝・式亭三馬・曲亭馬琴・十返舎一九・柳亭種彦・烏亭焉馬の六人の戯作者と、葛飾北斎・歌川豊国・歌川国貞の三人の浮世絵師の小伝を収める。京伝肖像は、文化14年刊の京伝作合巻『長髯姿蛇柳』の1オの肖像を写したもので、ほぼ同じ構図となっている。明治13年四方梅彦書写本。本書については、内村和至「写本『戯作六家撰』について」(『図書の譜』第15号)に詳しい。

82. 伊波伝毛乃記(いわでものき)1冊 曲亭馬琴著 092.5/62//H

文政2年(1819)成。无名氏(曲亭馬琴)著。野崎左文写。題名は「言わでものこと」と京伝の通称「岩瀬伝蔵」を言い掛ける。京伝死後、最も早い京伝の伝記で京伝に関する基本的な資料であるが、京伝に対する複雑な感情を持っていた馬琴の主観を色濃く含むものである。外題「岩傳毛乃記」。「蟹のや印」「野崎蔵書」朱印。末尾に「蟹の家のあるじ膳写并記(左)(文)」とある。「附録 戯作者六家撰の内 山東京伝」付載。野崎左文(1858~1935)は、明治から昭和にかけての新聞記者・狂歌師。



自筆もの



83. 狂歌短冊(きょうかたんざく)1枚 個人蔵

雪解 山 / \ の一度に笑ふ雪解にそこは沓 / \ 爰は下駄 / \ 京伝

この狂歌は京伝会心の一首で、さまざまな画賛・短冊に揮毫されていることが知られる(小池藤五郎『山東京伝の研究』)。

84. 巴山人魂の酒宴(はさんじんたましいのしゅえん)1軸 個人蔵

上部に「家業夢中 始終滅法 正直實儀 格別気楽」の四句と「寛政二庚戌春」「山東京伝」とあり、善魂の不動明王が悪魂を踏む図の摺物貼付。この四句は『御詠染長寿小紋』5ウに「始終滅亡 正直律儀」と表現

を変えた形で載る。下部の「巴山人」印の酒宴図は、『堪忍袋緒々善玉』と同趣。棚橋正博『江戸戯作草紙』口絵掲載。

85. 悪玉図(あくだまず) 1軸 個人蔵

善悪相形 禍福自見 戒人作悪 勸人為善 戊午初冬 実弟 京山陳人書

弟京山の戯号がみえる早い例で、この年京山は30歳であった。新潮古典文学アルバム『江戸戯作』13頁、たばこと塩の博物館『寛政の出版界と山東京伝』第169図掲載。

86. 野郎歌舞伎踊りの図(やろうかぶきおどりのず) 個人蔵

月にならび雁にならぶか踊子の輪となるもありつらなるもあり 京伝(「巴山人」朱印)

近世前期の野郎歌舞伎時代の古図を写したものか。高島千春(1777~1859)は、江戸後期の土佐派の画家。大坂から江戸に下ったのは文化13年(1816)4月(高田与清著『擁書漫筆』巻4・13)。この年の9月7日に京伝は没するので、京伝の最晩年の狂歌と考えられる。



役者絵



87. 本蔵女ぼうとなせ 尾上菊五郎(ほんぞうにようぼうとなせ おのえきくごろう) 細判錦絵 個人蔵

版元不明。キューネ氏旧蔵。安永9年9月中村座「忠臣名残蔵」。配役 本蔵女ぼうとなせ 初代尾上菊五郎。たばこと塩の博物館『寛政の出版界と山東京伝』第84図掲載。岩田秀行「図版解説」(『浮世絵芸術』129)参照。

88. 四代目沢村宗十郎死絵(よだいめさわむらそうじゅうろうしにえ) 大判錦絵 個人蔵

河内屋源七版。文化9年(1812)12月8日、29歳で没した四代目沢村宗十郎の死絵。文化年間の花形役者で、宗十郎の似顔絵は京伝合巻に躍動している。

訥子をいたむ

をしまるゝいの字なりけり小夜千鳥もやうを見ても鳴音かなしき

極楽の道行 かりやうびんがの鳥べ山 山東京伝述

へひとりきて、ふたりつれだつ極楽の、歌舞のぼさつのかねのこゑ、はや初七日やふた七日、諸人のをし

むやみぢをば、てらす仏のみちびきに、光りしあとのなげきこそ、若人ふたりの身のうへに、おもへばゆ

めの菊蝶や、経を巻水沢むら千鳥、むら/とたつは鳥べのゆふけふり、おもかげのこる似顔絵も、女形

には白むくや、雲の紫 諷誦の文、中着彼岸にくる念珠のおび、年はわかくてはつ花の、雨にしほるゝ立姿。

文化九壬申年十二月八日 善覚院達譽了玄居士

89. 四代目瀬川路考死絵(よだいめせがわろこうしにえ) 大判錦絵 個人蔵

河内屋源七版。行事副印「鶴金」(文化9年11月)。

文化9年(1812)11月29日、31歳で没した四代目瀬川路考の死絵。四代目沢村宗十郎とは好一对の夫婦役者であった。

しゆんちやういんかん よくわう あ せんしやう こ じ
・ 定院環 蒼光阿禅 昇居士

瀬川路考、帽子の 紫 を 浄土の雲に染かえて、歌舞の菩薩の数に入しをいたみはべる 山東京伝

かんざく はな すがた わた ゆき ほとけ かな
寒菊の華の 姿 を ゆひ綿の雪の 仏 にするぞ悲しき

※ 山東京伝の著作は作者名を省略しています。

参考文献

- 宮武外骨『山東京伝』 風俗絵巻図書刊行会 1916 年 11 月
小池藤五郎『山東京伝の研究』 岩波書店 1935 年 12 月
水野稔『江戸小説論叢』 中央公論社 1974 年 11 月
水野稔『山東京伝年譜稿』 ペリカン社 1991 年 3 月
水野稔『江戸文芸とともに』 ペリカン社 2002 年 8 月
鈴木重三『絵本と浮世絵 江戸出版文化の考察』 美術出版社 1979 年 3 月
棚橋正博『黄表紙総覧』 前編～後編・図録編 青裳堂書店 1986 年 8 月～2004 年 6 月
棚橋正博『黄表紙の研究』 若草書房 1997 年 6 月
棚橋正博『江戸戯作草紙』 小学館 2000 年 5 月
山東京伝全集編集委員会『山東京伝全集』 ペリカン社 1992 年 10 月～刊行中
たばこと塩の博物館『寛政の出版界と山東京伝』 1995 年 3 月
佐藤至子『山東京伝 滑稽洒落第一の作者』 ミネルヴァ書房 2009 年 4 月

第 64 回 明治大学中央図書館企画展示

共催：日本近世文学会

没後 200 年 山東京伝展

編 集：中央図書館ギャラリー企画運営ワーキンググループ

解説執筆：二又淳・長田和也（洒落本）・神田正行（概説）

展示協力：岩田秀行・棚橋正博

発 行：明 治 大 学 図 書 館

発行日：2016 年 5 月 14 日

2016 年 5 月 17 日訂正